中学校における剣道授業内容の検討

教科・領域教育専攻
生活・健康系コース（保健体育）　　指導教員　木　原　資　裕
西　本　浩　章

Ⅰ．緒言

平成２４年度から中学校の体育授業で武道の必修化が実施されている。この武道の必修化は、剣道人口の減少に頭を抱えている剣道界にとって、多く生徒に竹刀を握る機会を与えることができ、剣道の世界へと足を踏み入れてくれる可能性を秘めている大きな好機として捉えられている。しかし、剣道授業が与える印象によって、剣道離れにさらなる拍車をかける可能性も高い。このように中学校体育授業における武道の必修化は、剣道界にとって大きな分岐点になるであろう。

剣道授業の実施にあたり期待されていることは多いが、問題点も多く挙げられ、その１つが剣道経験のある教員不足である。限られた授業時数の中で剣道経験のない教師が内容だけでなく、剣道の本質を生徒に理解させることは容易ではない。

そこで本研究では、剣道経験が乏しい指導者でも行うことが可能な中学校剣道授業の内容を検討することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

1)　文部科学省がホームページ上に掲載している「新しい学習指導要領に基づく剣道指導に向けて」をダウンロードし、授業で剣道を行う意義、剣道授業での学習内容を明確にし、授業としての剣道の取り扱いについて検討した。

2)　平成２２年から平成２４年までの鳴門教育大学大学院の授業「教育実践フィールド研究」で、撮影した教育実習生（剣道初心者）の剣道授業の映像と剣道経験者（剣道指導歴３０年・剣道七段）の剣道授業の映像を分析し、剣道初心者が陥りやすい問題点の改善策を検討した。

3)　よりよい授業実践を行うため、様々な剣道経験者の剣道授業実践例を収集し、その内容を分析した。

4)　剣道初心者が陥りやすい問題点と剣道経験者の剣道授業実践例から剣道初心者でも指導実践が可能な剣道授業内容を提案した

Ⅲ．結果と考察

(1)　学習指導要領からみる剣道授業

①　中学校で初めて学習する内容のため、基本動作や基本となる技を確実に身に付け、それらを用いて、相手の動きの変化に対応した攻防ができるようになることが求められる。

②　発達段階に応じて体育分野の目標が高くなるのと同様に武道の内容も発達段階に応じて高くなっていることを踏まえた指導が求められる。

③　対人的技能の指導は、順序性を考慮して学習させる。

④　「態度」は、伝統的な行動の仕方を守ろうとする態度や互いに相手を尊重する態度、規則を守る態度、公正な態度、健康・安全に留意する態度などが重視され、剣道の特性に関心

をもち、楽しさや喜びが味わえるように自主的に取り組もうとする態度が求められる。

⑤ 「知識・思考・判断」は、剣道の特性や歴史、伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、試合の仕方や審判法などを理解しているかといった内容が求められる。

(2) 剣道初心者の教師が剣道授業で陥りやすい問題点と改善策

剣道授業初心者が陥りやすい問題点は、①授業内容の研究不足　②指導者の知識不足　③安全確認の不十分　④使用言語の乏しさ　⑤礼法の欠如の５つ挙げることができ、解決方法として

① 授業内容の研究不足では、実践内容の時間短縮方法を工夫すること

② 指導者の知識不足では、教材研究の進め方として実践方法と同様に禁止事項を把握し、技能の教材研究は、指導内容の実践を行うこと

③ 安全確認の不十分では、元立ち（受け手側）への指導と受け方の配慮及び竹刀の破損確認を徹底すること

④ 使用言語では、専門用語は分かりやすく伝え、擬音語の活用すること

⑤ 礼法の欠如には、日常生活との関連づけからという提案を行った。

経験の差を埋めるものは、教材研究で得た知識しかない。その知識なしでは、剣道授業を展開していくことは厳しいと考えられる。

(3) 剣道経験が乏しい教師でも行うことが可能な中学校剣道授業の内容を検討

第１学年剣道授業の内容としては、

- 剣道というものを知ってもらう。
- 基本的な知識、技能を身につけさせる。
- 対人技能を学ばせ、相手との攻防を感じさせる。
- 判定試合で競い合う楽しさを感じさせる。

というように、剣道の基本的な知識・技能を学習させ、自由練習で相手との攻防や判定試合で競い合う楽しさを感じさせる。また、礼法に関しては、日常生活との関連づけからの学習や授業の流れの中で学ばせることで「堅苦しい」というイメージを持たせない。

第２学年剣道授業の内容としては、

- 第１学年で学習した内容を思い出させる。
- 新しい技能の取得を通し、相手との攻防の質を高めさせる。
- グループ学習で自分の役割を果たし、仲間と協力してやり遂げる充実感を感じさせる。

というように、第１学年での学習内容の復習から展開していく。そして、新しい技能の取得と既習の技能を用いてグループでの演舞発表を主な内容として扱っていく。人前で発表する機会やその演舞に対しての周りの感想を与えることによって充実感と達成感を感じさせる。

Ⅳ. 今後の課題

今回、提案した剣道授業内容について、実際の教育現場での実践を行い、実践した指導者や受講した生徒の感想を得ることが今後の課題となる。

それらの感想や授業記録を分析することで新たな課題が見つかり、その課題の改善策を検討することで、さらに良い剣道授業内容を実践することができる。そして、授業改善を繰り返すことで１人でも多くの生徒が剣道に対して良い印象を持ってくれることが、剣道界への一筋の光明となると言えるだろう。

また一方で、斉藤孝（2004）が「あこがれにあこがれる」と言うように、剣道経験が乏しい教師にどのように剣道へのあこがれを持って教材研究を行ってもらえるかに剣道授業の成功がかかっていると言えよう。